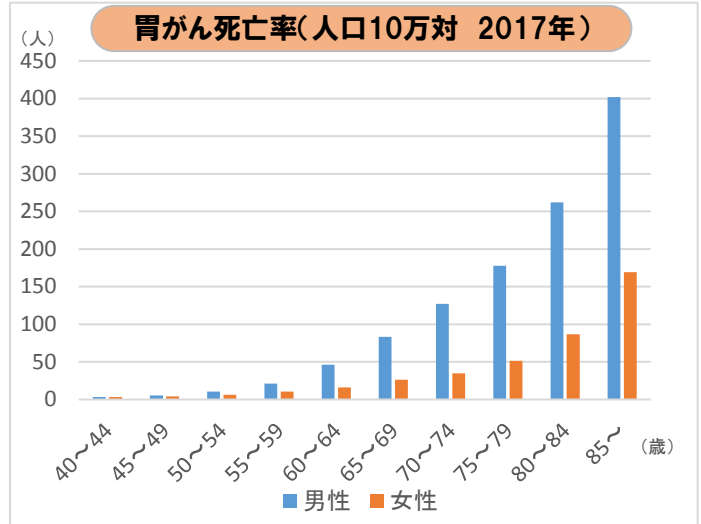
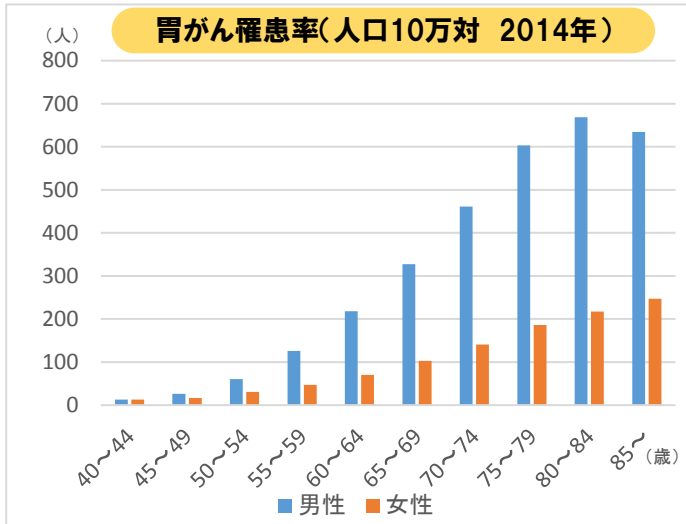


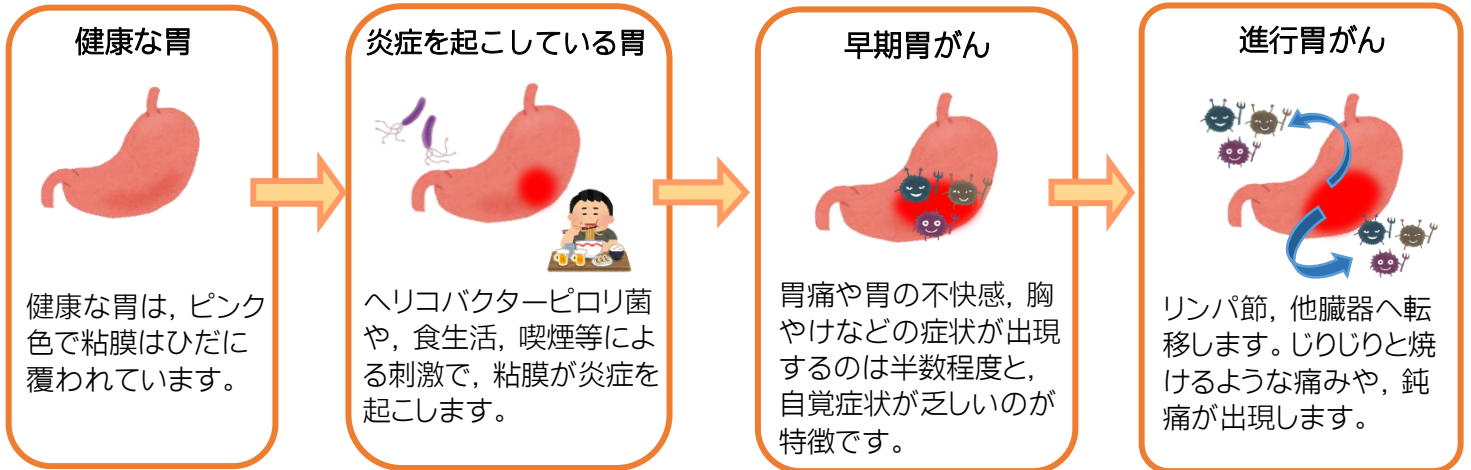
～胃がんの予防、早期発見のために～

『胃がん』は男性に多くみられるがんで、40歳代から増加します。ヘリコバクターピロリ菌の感染や、喫煙、塩分過多など様々な要因が重なって発生します。一方で、胃がんは早期発見し、適切な治療を行うと9割以上が治癒するとも言われています。胃がん検診では、従来の上部消化管X線検査等の他に、今話題の血液検査による、“胃がんリスク検診”があります。今回は、胃がんリスク検診を中心として、経過等についてお伝えしていきたいと思います。



出典: 国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策情報センター

胃がんの進行



胃がんのリスク要因

ヘリコバクターピロリ菌

胃粘膜に感染する細菌で、40歳以上の約7割の人が感染していると言われています。感染すると、胃粘膜の炎症を起こして、胃粘膜の萎縮を進行させます。



喫煙

たばこには発がん物質が含まれており、たばこを吸う人は、吸わない人と比較して、胃がんの発症リスクが2倍になると言われています。






食生活

塩分の過剰摂取や、野菜・果物の摂取不足、熱すぎる食べ物や飲み物の摂取により、胃がん発症のリスクが高まると言われています。

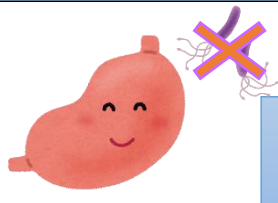
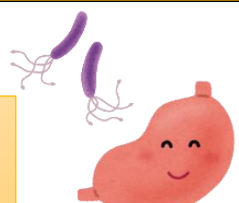




胃がんの検査の種類

<p>上部消化管 X線検査</p> <p>バリウムを飲み、レントゲンで撮影して上部消化管（食道、胃、十二指腸等）を調べる検査です。</p> <p>当センターで実施</p> 	<p>上部消化管内視鏡検査</p> <p>鼻や口からカメラを入れ、直接ポリープや胃炎、がんなどを見つける検査です。</p> 	<p>胃がんリスク検診 (ABC検診)</p> <p>血液検査で、ピロリ菌の感染の有無と萎縮性胃炎の有無を合わせて調べることにより、胃がんのリスクを調べる検査です。</p>  <p>当センターで実施</p>	<p>ピロリ菌検査</p> <p>胃炎や胃潰瘍の原因となるピロリ菌の感染の有無を調べる検査です。</p> <p>当センターで実施</p> <p>ペプシノーゲン検査</p> <p>胃がんの前兆としてみられることが多い、萎縮性胃炎の有無を調べる検査です。</p> <p>当センターで実施</p>
--	--	---	---



胃がんリスク検診とは...

	ピロリ菌の感染なし	ピロリ菌の感染あり
胃粘膜の萎縮なし	 A群	 B群
※胃粘膜の萎縮あり	 D群	 C群

E群 除菌群

過去にピロリ菌の除菌を受けた方は、E群となり、胃がんリスク検診の判定の対象にはなりません。また、胃の手術後の方、胃薬を内服している方、腎機能の悪い方等は胃がんリスク検診の結果が正しく出ない場合があります。当事業団では、E群(除菌群)の分類を行っておりません。

* ピロリ菌の感染によって炎症が続き、胃粘膜のひだがなくなり、血管が透けて見えるほど粘膜が薄くなった状態

【胃がん発生のリスク】

低い

↓

高い

A群	ピロリ菌の感染がなく、胃粘膜の萎縮のない状態。ピロリ菌の除菌は必要なし。1年間の胃がん発生頻度予測はほぼゼロ。
B群	ピロリ菌の感染があるが、胃粘膜の萎縮は進行していない状態。ピロリ菌の除菌は必要。1年間の胃がん発生頻度予測は1000人に1人。
C群	ピロリ菌の感染があり、胃粘膜の萎縮が進行した状態。ピロリ菌の除菌は必要。1年間の胃がん発生頻度予測は500人に1人。
D群	以前ピロリ菌の感染があったが、ピロリ菌が住めなくなるくらい、胃粘膜の萎縮が進行した状態。1年間の胃がん発生頻度予測は80人に1人。

公益財団法人 宇都宮市医療保健事業団 健診センター
 〒321-0974 宇都宮市竹林町968 TEL (028) 625-2213 FAX (028-625-2215)

あなたとあなたの大切な人のために年に1度、健康診断を受けましょう！